

アフリカ研究と独立後50年のアフリカ

龍谷大学社会科学研究所プロジェクト

2008年10月11日

吉田昌夫（日本福祉大学大学院）

アフリカの年といわれたのは1960年、しかし私の感覚では、独立を遂げた国が多かったその年より、数年前からアフリカの年は始まっていたのである。例えば1957年、この年に初めて黒人アフリカ人の民族運動が結実して、西アフリカでガーナが独立したのである。私がアフリカに興味を持ち始めたのもこのころであった。翌年私はアメリカ留学を終えて日本に帰国する途中ガーナに立ち寄った。

それから今年で50年、私はアジア経済研究所でアフリカについて研究を続けてから、30年後に大学で教える職業についたが、ずっとアフリカに注目しつづけている。アフリカを見ていると、他では見えない世界の動きが見えるような気がする。本日は、この50年の節目節目に出会ったアフリカの出来事や人物を見ながら、アフリカの政治経済上の特徴と変化を通観してみたい。

1. 1958年9月のガーナ訪問 — アフリカ諸国は出発を間違えたか？（エンクルマ）
2. 1962年から63年のケニア — 当時の若者が支持していた国づくりへの意欲（ケニヤッタ）
3. 1967年のタンザニアが選んだ社会主義と政府主導の国づくり（ニエレレ）
4. 1971年のウガンダ、アミンの軍事クーデタの影にあるもの（アミン）
5. アフリカの「優等生」という呼び名の危うさ（コート・ジボワールとケニア）
6. 汚職と国家による経済統制（タンザニア）
7. 1980年代の経済困難 — その後の構造調整政策がもたらしたもの
8. パンアフリカニズムと南アフリカのアパルトヘイト廃絶
9. ポスト経済構造調整と、政治（民主化と人権）と経済（貧困削減と開発）の両面での、アフリカ諸国の自主性の問題